

3年にわたった本連載も最終回だ。念願の田中角栄元首相については前回書いた。しかし論じておくべきことがもうひとつある。新潟日報である。地方紙の購読率は自治体によって大きく異なる。たとえば沖縄では琉球新報と沖縄タイムスの二紙が圧倒的なシェアを占める。中央紙がまったく信頼されてないからだ。本紙の県内購読率は、信濃毎日、北日本新聞、山形新聞といった近隣の有力紙に比べても低くない。

# 時々 草々

ではその責任とは何か。もちろん最大のものは政治権力のチェックである。県議会と県内市議会の多くが首長の行政権力に対して無批判、ど

い。それだけ県民に信頼されているということだろう。だからこそ報道機関としての責任も重くなる。

越智 敏夫 (新潟国際情報大教授)



## 波風立てる報道期待

ろか全面的支持という現状では、報道機関が権力をチェックするしかない。じつは日本近代史にお

ろか全面的支持という現に流れる批判性は感じられなかった。その意味で田中元首相とも本紙は緊張関係を維持できたといえるだろう。

民が注視するのも当然である。内部とは社内の議論の活性化、より露骨に言えば記者のあいだの相互批判の保証である。

いて、有力地方紙と権力の癒着によって生じた政治問題は多く見られる。数年前、田中元首相関連の本紙記事をまとめて読む機会があったが、全体

しかし他県の例を見ると、そうした地方紙の独立性が一瞬にして消え、御用新聞になり下がる危険性もゼロではない。したがって最後の問題は、誰が新潟日報をチェック

外部とは読者や他のメディアからの批判ではないところに発展はないから。もちろん本連載もそうした波風のひとつとして書いてきたつもりである。賛否ともに多くのご意見をいただいたのもうれしかった。ご愛読、ありがとうございました。

おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治理論。

(おわり)